

歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



第3回写真コンテスト 最優秀「山形五堰(御殿堰)」 山形市・沼澤麗子氏撮影

- ◆ 最上氏と山寺立石寺
- ◆ 山形地方の山城の植生について
- ◆ 歴史随想「駒姫忌のころ」
- ◆ 短歌「山形城今昔」

No. 10

2003年3月発行

財団法人最上義光歴史館

最上氏と山寺立石寺



伊藤清郎

一 立石寺の漆塗りと和紙皿

2002年12月2日(月)『図説山形市の歴史と文化』執筆のために山寺立石寺へ写真撮影に伺った。山形市社会教育課の方・山形美術館加藤千明氏・高野山の日野西真定氏など、総勢10人でおじやました。

予定通り写真は撮れたのであるが、その中で住職清原浄田さんが出してくれた寺宝のなかに、驚くべきものがあった。それは仏事の際に使用する皿である。素材は紙でできていて、その上に赤漆を塗り、内側には黒漆で蓮の花を形取った模様が描かれているもので、全部で50個あった。50個全部の底には次のように記されていた。

「惣社徳蔵寺寄進

箕輪東光院貢献 五十枚之内

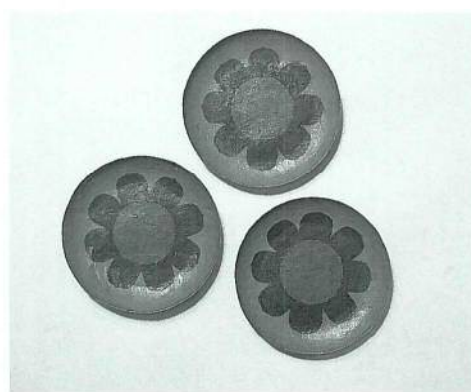
天正九巳八月吉日

」



天正9年(1581)に箕輪東光院の弘賢が、惣社徳蔵寺に寄進したものであることがわかる。それがいつの時期かに出羽国立石寺に運ばれてきたことになる。しかも寄進された50個がそのまま残されているのである。

惣社は上野国の惣社であり(群馬県前橋市元惣社町)、隣接して徳蔵寺(叡山放光寺ともいう)がある。この寺は天台宗の寺院で、文明3年(1471)足利氏の祈願寺として建立された(中世一宮制研究会編『中世一宮制の基礎的研究』岩田書院、2000年)。惣社の旧社地は現在地の北西500m程に



あり、永禄9年(1566)武田氏の兵火にあい焼失したのを、元龜年間(1570〜73)現社地に再建したものである(『別冊歴史読本 日本神社名鑑』諸国一宮『新人物往来社、2002年)。

上野国の惣社とすぐわかったのは、立石寺住職69世清原浄田氏がこの皿の底に記された寺名を見てすぐ「この名前は群馬県にある」と指摘されたことによる(群馬県前橋市)。その眼力たるやさすが、常人の及ばざるところ、感服する次第である。寺社間における関東と出羽国との交流については、慈恩寺(寒河江市)の例に見られるよう

に頻繁であること既に周知の事実である。

さて箕輪であるが、現在の群馬県箕輪町に位置する、榛名山の扇状地であり、西明屋北部の地形が箕の形をしていることからくる地名である。同町西明屋にある箕輪城は長野氏が築城した山城である。その後武田氏と後北条氏を取り合いをした西上野の中心的な地位を占める重要な城となっていく。近世には井伊直政が城将となるが、慶長3年高崎城(高崎市)に移ると廃城となり、寺社もかなり共に移転したようである(『日本地名大辞典 群馬県』角川書店)。残念ながら東光院については今のところよくわからない。

いずれにしても中世の貴重な史料でありしかも漆芸の面からもとても貴重な物であることはまちがいない(加藤千明氏のご教示による)。山寺の寺宝は、まさしく宝の山といふべきである。

§

二 最上氏と立石寺の関わり

この最上氏と立石寺は代々深い関係をもっている。延文元(正平11、1356)斯波兼頼が山形に羽州管領として入部すると、根本中堂を再建し

たことからじまる。山寺のある位置が、山形城の鬼門鎮護の位置にあることに起因するとされる。

さて表は両者の関係を現している。永正17年(1520)伊達植宗が天童・高櫛を攻めてきたときに、山寺の衆徒らが伊達方に加担したことを恨んで、大永元年(1521)天童・成生両氏が山寺に攻撃をして灰燼に帰してしまふ。「寺中家無一十余年、其間堂社破」の状況にあった山寺を最上氏らの援助などによって再興していく。天文3年に立石寺日枝神社が修造されるが、旦那の一人「山形殿」は最上義守である。同じく焼き討ちによって不滅の法燈が焼失してしまつたため、天文12年(1543)立石寺の一相坊圓海は、4月に比叡山に登拝し、6月に根本中堂の燈火を分火してもらい、海上を輸送した後立石寺に納火する。この時助成したのが義守の母であるが、義守は中野義清の次男とされるので義清夫人ということになる。日枝神社の修造もそうであるが、山寺の復興を最上宗家だけでなく一族の総力を挙げて成し遂げようとしている姿がうかがえる。

この燈火は元龜2年(1571)に信長の焼き討ちにあつて焼失した比叡山根本中堂に、今度は立石寺側が天正13年に登拝して納めることになる。

永祿13年義光が願文を献して、本懐を遂げたあかつきには、「他宗住居」を

認めないことを誓っている。「本懐」については、従来から義光の家督相続のことを意味していると解釈されている。父義守との父子相克があつて、家督相続に暗雲が立ちこめている状況下で願文が書かれたことになる。自分の将来を託すほどに山寺への崇敬が厚かつたことになる。それにしても山寺内部の対立抗争などについても、よく知っていたことには驚く。天正14年義光は常燈油田を寄進する。この時自ら「高櫛小僧丸 義光」と称している。「高

櫛小僧丸」という呼称については、義光が高櫛(天童市)に居住していたからこう称したのだという解釈もあるが、どうであろう。高櫛には、高櫛城・石仏寺・専称寺(後に願行寺)などが存在して、確かに重要なところではある。しかしながら天正12年(1584)いわゆる天童合戦に勝利して、領国を現在の村山・最上両地域に拡大し、さらに庄内まで触手を伸ばしている段階で、高櫛に居住することは考えられない。家督を相続する以前の段階であればあり

年月日	史料名	内容	出典
天文3・6・29 (1534)	日枝神社棟札	旦那として、山形殿・中野殿・東根殿・高櫛殿が連名	立石寺日枝神社棟札
天文12 (1543)	一相坊圓海置文写	圓海は、最上義守の母の助成を受けて4月に比叡山に登拝し、6月に根本中堂の燈火を分火してもらい、海上を輸送した後立石寺に納火する	立石寺文書
永祿13・1・吉日 (1570)	最上義光願文	本懐を遂げたときは、「他宗住居」を認めないことを誓約	立石寺文書
天正14・1・1 (1586)	最上義光寄進状	常燈油田として重澄郷内島2貫850文の地を寄進	立石寺文書
慶長4・7・吉日 (1599)	納経堂棟札	最上義光、納経堂を修造する	立石寺納経堂棟札
慶長13・10・26 (1608)	鰐口銘	楯岡光直(義光の弟)は、義光の長寿を祈願して根本中堂に鰐口を寄進	立石寺根本中堂鰐口銘

得ないことではないが、それにしても何故「高櫛小僧丸」と名乗つたのか。他にも天正17年2月20日、最上義光預置状(青木文書)で、義光は「谷地小僧丸」と名乗っている。いずれも今後の検討課題ではある。

その後近世に入つてから、慶長4年義光は、立石寺納経堂を修造している。慶長13年には楯岡光直(義光の弟)が、義光の長寿を祈願して立石寺根本中堂に鰐口を寄進している。

このように最上氏が山寺を崇敬し、保護するという関係は、最上氏が改易されるまで続いていった。

伊藤清郎

(いとう・きよお)

一九四八年 宮城県に生まれる
一九七一年 東北大学文学部国史学科卒業
一九七六年 東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学
現在 山形大学教育学部教授・文学博士

〔著書〕

『霊山と信仰の世界』(吉川弘文館、一九九七年)
『中世の城と折り』(岩田書院、一九九八年)
『中世日本の国家と寺社』(高志書院、二〇〇〇年)

〔共著・編著〕

『山形県の歴史』(山川出版社、一九九八年)
『中世出羽の領主と城館』(高志書院、二〇〇二年)
『中世出羽の宗教と民衆』(高志書院、二〇〇二年)

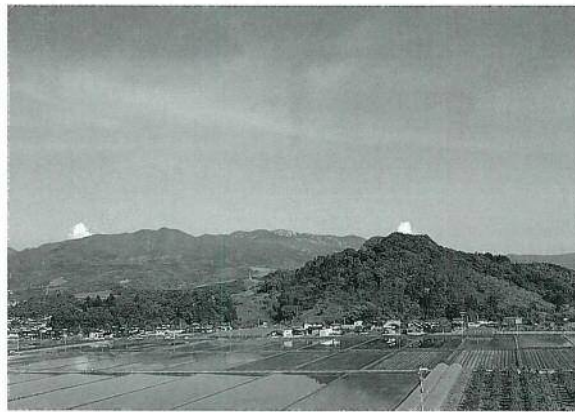
山形地方の山城の植生について

県文化財保護指導員
フロラ山形会長

吉野智雄

県域は日本の植物区系上、日本海地区の中央部にあって、山地帯はブナ・ミズナラなどの落葉広葉樹を主とする冷温帯林が発達するところである。林床には裏日本型気候とくに多雪地に適応した比較的新しく分化したと考えられるマルバマンサク・タムシバ・タニウツギやオオバキスミレ・スミレサイシンなど、多くの日本海要素の植物が分布している。また多雪に圧伏し伏条性を身につけたヒメアオキ・チャボガヤ・エゾユズリハなどの常緑小低木の小群落も見られ、キバナイカリソウ・キクザキイチリンソウなどの日本海地区の植物と共存している。

しかし内陸の中南部、特に山形市中心とする山形地方の山地帯脚部は日本海要素の植物を伴う、クリ・コナラを主とする暖温帯系の落葉広葉樹林に覆われているが、局地的にはアベマキ・クヌギなどの暖帯落葉樹を混交する林分が見られる特異な地域である。アベマキは台湾・中国などの暖帯を自生の本拠地としている樹木であるが、



長谷堂城跡の遠景

その林分は市街地東方の盃山などの丘陵地に、かなり広く分布しており、植栽起源と思われる大木が薬師公園や鈴川の印鑰神明宮などで見られる。また周辺の山地帯や山城の脚部にはコナラ林にクヌギの混交する残存林(木)が点在している。クヌギは本州の岩手・山形以南から沖縄、九州、中国大陸にかけて分布するが、その発起源は中国雲南省の暖帯であるという。

ちなみに、アベマキ・クヌギは褐色の枯れ葉を枝につけたまま越冬するので、他の樹木とは容易に識別できる。この現象は日本列島の温暖化に伴って、暖地系の樹木が寒地(山形地方が北限地)まで分布域を広げてすみついたが、その後の寒気に襲われたときに、離層を完全に形成する性質を見につけていなくなったからだと言われている。

山形地方の山城は、山地帯脚部から標高二〇〇m前後の独立峰上にあつて、山腹や頂上からの眺望は群を抜く、天険の地に立地している。本丸(頂点)を中心に、曲輪が整然と階段状に造成されており、山腹を取り巻く自然の地形は急峻な断崖をなしている。また山麓は交通の要衝であつて、深い峡谷や河川に挟まれ、人為的な空堀などが巡らされてきたという。山城はまさに自然の要害を巧みに利用して構築されており、本丸には人知を尽くしても容易に踏み込めない構造である。

現在、本丸跡などは公園や広場などに利用されており、曲輪の平坦部はス

ギ・クヌギ・クリ・カキなどの植栽地となつている。曲輪の法面や登攀路の周辺ではヤダケ・チャボガヤ・ケヤキなどの、山城特有の植生が残存しており、山麓の河辺にはケヤキ・オニグルミ・ミズキなどの二次林や植林されたスギ林が見られる。

また広大な山腹はクヌギを伴うクリ・コナラの高木をはじめ、ケンボナシ・ネムノキ・ウワミズクラ・アズキナシ・マルバマンサクなどの、萌芽力の強い落葉広葉樹林によつて占められており、林床にはツノハシバミ・ヤマウルシ・チャボガヤなどの低木や、それにシヤガ・チゴユリ・オシダなどの草本からなる林分である。特に山城の水源地となりうる、やや湿り気が多い土地や沢筋湧水地にはオニグルミ・ケヤキ・ミズキなどの高木林が見られ、林下にはシダ類が群生している。

このように特筆すべき植生が見られる、山形地方の中南部、特に山形市は気候的には暖温帯(又は暖帯)に属する地域である。古くから政治・経済、教育・分化の集積地として発展しているが、さらなる枢要な役割を果たせる快適環境である。山形地方の山城は歴史的にも、また植物分布上からも市民共有の貴重な財産であつて、その保全・保護には万全を期したいものである。

駒姫忌のころ

安部英子

歴史に興味をもって書物を紐解くと、時代の状況と真実の道すじが見えてくる。

戦国の世、男たちはきわめて残忍であるのにくらべると、女は情深く、礼儀正しく美しい。落城を前に凛として敵陣に斬りこむ女。刃を胸に命を絶つ妻。そして我が子を家臣に託して逃がす母。自己を主張し、信念を持つていのちを

全うした姿が目に見えぬ。

太閤秀吉には、正室との間にお子が無。側室淀君に第一子鶴松が生まれたが夭逝。もうお子に恵まれることはなからうと、甥秀次を後継者と定めた。秀吉の野望はとどまるところを知らず、朝鮮出兵の前線基地、名護屋城に上から淀君と松の丸を呼び寄せ優雅に過しているうちに淀君が懐妊し、秀頼誕生。その後万事が狂気の沙汰へとつき進んでいった。

時は文禄四年(一五九五)七月八日。

秀次は関白職を剥奪され高野山へ追放された。ちょうど駒姫が聚楽第に入った頃だ。秀次が駒姫を所望したとき姫は十一歳。最上義光は、いずれ成人した折にと約したといわれるが、十五歳となり、上洛を促す秀次にどんなに苦悩したことか。駒姫も戦国の世を生きた女として、最上家安泰と繁栄を願い、聚楽第入りを自らの意思で決意し、父の心の重荷を解いたのに相違ない。上洛したばかりの七月八日、駒姫をはじめ秀次にゆかりのある御一族三十九人が捕えられて、家臣徳永寿昌の邸に移された。駒姫の上洛があと二、三日遅れていたならばと、運命の無慈悲を歎くばかりだ。

短歌

山形城今昔

山形新聞歌壇選者
齊藤茂吉記念館研究員

高橋 宗伸

諸大名のあこがれし名ぞ「虎賁^{こほん}郎将^{ろうしょう}」慶長十六年の叙任を伝ふ

山形城二の丸に建つ歴史館石を配せる庭のしづもり

美女なるがゆゑの悲劇は駒姫も王昭君も同じ運命^{さだめ}か

庄内に残る義光の寄進状神仏帰依のまごころとして

幾度も連歌の会を催せし義光を偲ぶ城の小徑に



八月二日三条河原での処刑を知り、義光は八方手を尽して助命に奔走した。京都慈舟山瑞泉寺縁起によれば「未だ関白殿に見参なき中に此難儀できれば(中略)尼になせとありければ、伏見より揉みにもんで早馬打ちけるに今一町ばかりにてとどかず、害しけるこそ哀れといふも猶余りあり」とある。

世にも稀なる無残な処刑を知った義光は、持仏堂に籠り湯水を絶った。大崎夫人は、ふた七日の法要のあと、ひと足先に黄泉路の人となった娘を追慕し、相共に手を携えて阿彌陀仏の御来迎を仰ぐとの決断で命を絶つたのではなからうか。妻子を失った義光の

驚愕と痛哭は余人には計り知れない。

ふるさと山形に戻った義光は、専称寺を二人の菩提寺として、篤くその霊を弔った。境内には、文禄年間の悲話を物語る梵鐘が当時のままの鐘楼に吊るされ、打てば四百年前の音色でひびきわたる。また一隅には、義光が持ち帰ったと伝えられる駒姫の遺髪を埋めた「黒髪塚」があり、先代住職の演説が「諦雲院釈尼誓聴」と法名を刻み五輪塔を建てた。駒姫忌のころ参詣すると竹生の中から秋風が立ちさやさと物語る。

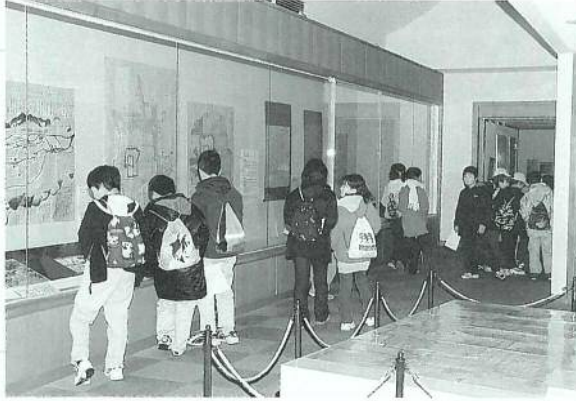


黒髪塚

殺風景なブロック塀に囲まれて鎮もる黒髪塚に香華を供え、ひとり跪いていると従来戦国の世の女たちは、政略結婚に裏打ちされ、物のように扱われ抗しきれない女人像との認識があったけれど、決して女々しく弱々とした人生ではなかったと思いを深くする。(エッセイスト・お雛さま研究家)

※このたび専称寺・瑞泉寺・最上義光歴史館で相談のうえ九月二日を駒姫忌とした。

平成14年度
事業スナップ



特別展風景



特別展「やまがたの城と城下町」



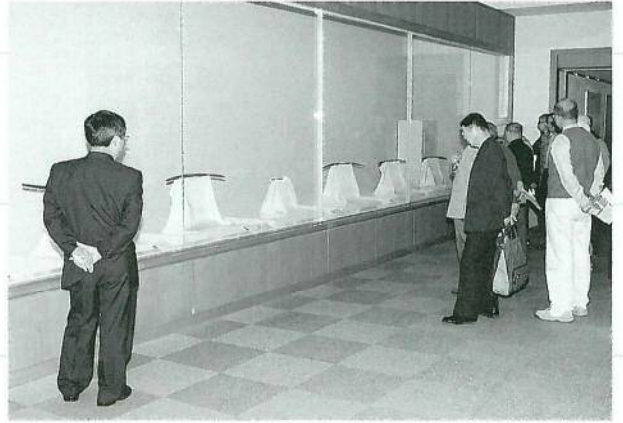
第47代当主最上公義氏ご夫妻ご来形
(山形市長表敬訪問)

平成14年度事業

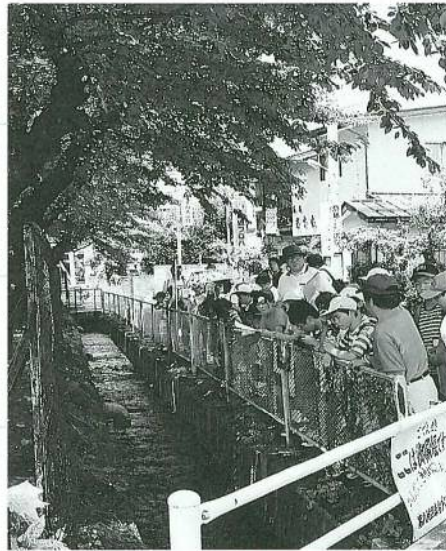
- ◆企画展 《4月9日～6月9日》
「よみがえる赤羽刀」 展示総数14口(うち研磨済5口)
ギャラリー・トーク 5月4日・11日・25日・6月8日
講師／布施幸一先生
- ◆特別公開「坂紀伊守像」《4月26日～5月6日》
- ◆こども講座 《7月30日》
「山形五堰の歴史を探る」→御殿堰を歩いて見よう→
赤門・黒門→御殿堰中央親水広場→専称寺
↓小白川第一分水工→光禪寺→天沼
- ◆特別展 《10月12日～11月24日》
「やまがたの城と城下町」 展示総数34点
- ◆こども講座 《10月12日・26日、11月9日》
「第3回少年少女やまがたの歴史探検隊」
→城下町やまがたを探って歴史を発見しよう→
講師／板垣英夫先生・片桐良雄先生・佐藤圭司先生
- ◆夏休み自由研究 《10月19日～27日》
「山形五堰の歴史を探る」作品展
出展総数9点(小学校9校9人)
- ◆歴史講座(史跡めぐり) 《10月31日》
→名刹慈恩寺と最上家ゆかりの城跡を訪ねて→
慈恩寺→谷地城跡→長瀬城跡→清水城跡→興源院
講師／北島教爾先生・熊谷勝保先生
- ◆第1回歴史講座 《1月11日・25日、2月1日》
「最上義光と連歌」 講師／名子喜久雄先生
- ◆第3回写真コンテスト 《2月1日～23日》
「最上時代の面影を探る」入賞作品展
入賞作品 一般の部24件／小中学生の部3件
- ◆第2回歴史講座 《2月8日・15日・22日》
「山形城下探訪「山形風流松木枕」を読む」
講師／渡邊信三先生
- ◆刀剣講座 《3月1日・8日・15日》
「初心者のための日本刀講座」 講師／布施幸一先生
1日「日本刀の歴史」、8日「郷土の刀工」
15日「取扱いと鑑賞の手引き」



第1回歴史講座 名子喜久雄先生



企画展「よみがえる赤羽刀」
ギャラリートーク 布施幸一先生



こども講座「山形五樓の歴史を探る」



歴史講座(史跡めぐり)
「名刹慈恩寺と最上家ゆかりの城跡を訪ねて」

来館案内図



ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分
 入館料 一般 大人300円 高校生200円
 小・中学生100円(土曜日は無料)
 団体(20名以上)大人240円
 高校生160円 小・中学生80円
 休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)
 12月29日から1月3日
 交通 J R山形駅より徒歩約10分
 大手町バス停留所より徒歩1分

最上家にかかわる資料等をお持ちの方、
 ご存じの方、ご一報ください。
 ※最上時代の歴史や文化を明らかにするための資料を探しております。今後の研究のために役立てたいと思います。よろしくご協力ください。

ご協力をお願い



北天の巨星 **最上と義光** 片桐繁雄著
 一〇〇〇円(税込)

現在の山形市の基礎を築いた名君、
 最上義光の生涯と業績を史実に
 基づき読み易い文章で紹介
 ●お問い合わせは歴史館まで

刊行物のご案内

鉄砲の威力

長谷勘三郎

ヨーロッパ渡来の鉄砲が組織的集団的に使われた嚆矢は、織田信長の長篠の戦い(1575)とされているが、慶長五年(1600)の長谷堂合戦でも鉄砲はフルに活用された。

義光は、長谷堂への応援として「小筒足軽二百余人」を派遣したと『羽源記』にあるが、総数がどれくらいかははっきりしない。

伊達政宗が山形に派遣した援軍には「鉄砲四百五十四丁」が含まれていたと、水沢の留守家文書には書いてある。到着が遅れたとはいえども、この加勢が最上勢を元気づけたことはいうまでもあるまい。

直江兼続は、長谷堂城を攻めあぐみ、主君景勝に兵力増員を要請する。景勝は直隸鉄砲隊五百のうち、三百を派遣したらしいと、これは九月二十六日付け伊達政宗の手紙に、敵方の捕虜から聞いた話として書かれている。

当たり前かもしれないが、この時代ともなれば、鉄砲こそ戦いを左右する最重要武器だった。

十月一日の上杉軍撤退の時は、上杉

鉄砲隊が華やかに活躍する。

「種子島の中筒鉄砲」の達者な兵を五十人ずつ四組に分けて山中にひそませ、追撃する最上兵に雨霰と撃ちかけたという。これに辟易してひるんだ隙に、上杉軍はさあつと引き退く。見事な戦法だったらしい。

陣頭に立った義光は、この時兇の真つ向を撃たれた。義光の側近、堀喜伴齋は、左肩先から右胸まで射ち抜かれて即死した。志村藤衛門も主君の身代わりのごとくになって、戦死した。

上杉方、前田慶次の、赤柄大身の槍を振るつての奮闘は有名だが、実際は鉄砲にはかなうまい。新影流の劍豪上泉泰綱といえども、部下が鉄砲で追い散らされて独りとなつては、腕の見せようもないだろう。

ところで、こんな言い伝えが長谷堂にはある。寄せ来る上杉の軍勢を山上から俯瞰射撃しようとする、鉄砲にこめた弾丸がコロコロと抜け落ちてしまつて、なかなかうまく射撃できなかったという話である。

これなどは旧式の鉄砲だったのであろうか。それとも、根も葉もない民衆の語りぐさにすぎないのだろうか。

「最上時代の面影を探る」

小中学生の部
最優秀

小白川天満宮 (三枚組)

山形市立第一中学校
角田康浩さん

一般の部
最優秀

山形五堰

笠堰・御殿堰・八ヶ郷堰
宮町堰・双月堰(五枚組)

沼澤麗子氏



笠堰



宮町堰



双月堰



八ヶ郷堰



※御殿堰は表紙に掲載

平成15年3月発行

編集・発行 財団法人最上義光歴史館

〒990-0046

山形市大手町1-53

☎023-625-1710

☎023-625-1710

田宮印刷株式会社

印刷